

# 「希望」と「忍耐」の「辞書」

——大江健三郎『個人的な体験』論

松本拓真

## 1. はじめに

『個人的な体験』（新潮社、一九六四年八月）は、脳ヘルニアをもつ赤んぼう（以下、赤んぼうと略記）を引き受けるか否かの狭間で揺動する鳥という青年が、突如赤んぼうを引き受ける「選択」をするまでを描いた全一三章と、この鳥の決断が「欺瞞の罟」を拒否すべく「正統的に生きるべく強制された」結果であったことと、脳ヘルニアが実は単なる肉瘤であったことを明かす、アステリスク記号（\*）を挟んだ部分とで構成された長篇小説である。

地方都市の不良時代を過ごし、二〇歳を境に上京し、東京の官立大学へ進学した鳥は、誕生した赤んぼうから逃げ惑い、「一応は上向き段階にあるキャリア」とされる予備校の「英語」教師の職を失う。「袋小路」の空間から「出口」を求めようと足掻き続ける鳥であったが、それは結局「不毛で恥ずかしいだけの厭らしい穴掘り」として認識されるのであった。そんな彼のことを救い出す人物として現れるのが大学時代の友人、火見子である。夫

に「自殺」されてしまった過去をもつがゆえに、昼間に彼とのありえたかもしれない別の宇宙を夢想し、夜になると「MG」で疾走するという生活を送っていた火見子。鳥と再会した彼女は、彼を救い出そうとアフリカへ旅立つ計画をし、その提案を受け入れた鳥は、赤んぼうを墮胎医に引き渡そうと考える。

こうした考えに至るまで、赤んぼうの「衰弱死」を待ち望むという生活を送っていた鳥のことを非難する人物が、「バルカン半島の小さな社会主義国の公使館員」のデルチェフさんである。ある日彼は、偶然知り合った日本人女性から一緒に居て欲しいと言われ、「感情的理由」に突き動かされて外交官の仕事を放棄する。「子供に対して親のできることは、やってくる赤んぼうを迎えてやることだけです」と説くデルチェフさんは、鳥に対し扉に「希望」と書いた「辞書」を授ける。

墮胎医に引き渡した後、鳥と火見子は「ゲイ・バー《菊比古》」に向かう。地方都市の不良時代に、鳥によって「同性愛のアメリカ人の情人であることを暴」かれた過去をもつ菊比古だが、七年ぶりに再会した彼は、「ゲイ・バーの経営者」をしていた。そん

な彼との再会を機に、突如鳥は赤んぼうを引き受ける「選択」をする。手術は成功したが、その後遺症で「I・Qのきわめて低い子供に育つ可能性」をもつ赤んぼうを育てるために、鳥は「上向きの段階にあるキャリアとはすつかり縁をきるつもり」で、「外国人の観光客相手のガイド」になることを決意する。物語は、鳥が「扉に《希望》と書」かれた「辞書」で「《忍耐》」という言葉を引きくことが示唆されて終わりを迎える。

発表当初の研究史上では、「鳥の変化・成長を表現するという、最初の構想をまもりたかった」という大江の言葉を受ける形で、鳥の実存主義的な「選択」ないしは、そこに行き着くまでの過程を肯定的に評価する論調が主流をなす。本作が「大江の青春から大人への移行の跡を示している」という松原新一論を前提に、多くは鳥の決断、及び、結末部に至るまでの過程の論理を補強する形となった。

だがこうした事態に対し、「個人的な体験」という小説は、他人には共有されず、一般化出来ない一回かぎりのまさに「個人的な体験」を追っているものであり、青年は「自分自身にこだわり」続けていくしかない」と指摘する柴田勝二や、「鳥が火見子や赤ん坊の余剰の頭部を切り離すことは、自己を自己たためししていた根拠を捨象するという点で、自身に対してなされる去勢行為にほかならない」とし、「自己の身に生起した去勢に対して主人公があまりにも無自覚であること」が、結末部の問題点であると指摘する柴田勝二などは、これまで議論の俎上上げられてきた「正統的に生きる」という倫理的な価値基準からではなく、非倫理的な次元から鳥の「変化・成長」に対して考察を試みている。

以上の肯定派、否定派のいずれの系譜においても共通するのは、鳥が「変化・成長」しているのか否かという、彼の主体化の過程を前景化している点である。ただし従来の議論は、その点に着目するあまり、主体化された先にあるものについて問うことを避ける傾向がある。そもそも、主体化のプロセスを経て鳥が獲得した自己とは何か。

おれは赤んぼうの怪物から、恥しらずなことを無数につみ重ねて逃れながら、いったいなにをまもうとしたのか？ いったいどのようなおれ自身をまもりぬくべく試みたのか？ と鳥は考え、そして不意に愕然としたのだった。答えは、ゼロだ。

これは鳥が翻意を遂げた箇所だが、彼が最終的に「ゼロ」と定めた自己とは何か。また、仮に自らを「ゼロ」と定めた鳥が大江の発言通りに「変化・成長」しているのであれば、それは、最後に「ガイド」という職業を「選択」し、「辞書」を参照する鳥の生き方と係り合っているはずである。

前者に関して、柴田勝二は、「外国人の観光客相手のガイド」という選択自体が、彼みずからの着想ではなく、予備校を去ろうとしている鳥に対して教え子が与えた忠言をそのまま受け入れた点に注目し、それを「他者の存在に浸食される去勢」として否定的に読み取るが、一方で高橋由貴は、「火見子の泣き声を切り捨て、赤んぼうの声にのみ応える」鳥を、「二者の泣き声を同時に掬い取ることでできない「翻訳者」につきまとう限定的なあ

り方」であると指摘しつつも、結末部で鳥が「選択」した「ガイド」という職業には、「成長」と「自己中心的な姿勢」とに引き裂かれる両義的な性格が刻み込まれているという。

高橋は、赤んぼうの「声」を受け入れる鳥の立場を「限定的なあり方」として解しているが、彼が引き受けた赤んぼうの「声」には、「人間のあり」とある言葉のすべての意味」が含まれていることを看過してはならない。本稿では、赤んぼうの「声」が「言葉のすべての意味」を孕むという点に着目し、結末部で「ガイド」という職業を「選択」し、「辞書」を参照する鳥の生き方を、つまりは鳥が自らを定位した「ゼロ」なるものの在り方を検討していく。

## 2. アフリカ「地図」

近年の先行研究において、火見子が愛用する「MG」には、近代化／高度成長のエスカレーションから脱出する方途を模索するという課題が透けて見える」と指摘する服部訓和や、鳥が赤んぼうの「声」を聴き取ることができれば、「両者のあいだに形成される関係性は、抑圧的な身体管理への関心を強くする社会への批評として機能する」と指摘する北山敏秀などは、本作を同時代の社会的な言説に接続し、鳥の生き方とは別のところに価値を見出している。両者の論考からは、鳥が「変化・成長」しているの可否かを絶えず議論してきた先行研究から脱却する狙いが垣間見える。

では、そもそもなぜ、従来の先行研究は、鳥の「変化・成長」

の有無、つまりは彼の「個人的な体験」に主眼を置いてきたのか。従来の批判としてあったのが、結末部で鳥が火見子を見捨てて赤んぼうを救う行為に対してである。

「個人的な体験のうちにも、ひとりでその体験の洞穴をどんどん進んでゆくと、やがては、人間一般にかかわる真実の展望のひらける抜け道に出ることできる、そういう体験はある筈だろう？ その場合、とにかく苦しむ個人には苦しみあとの果実があたえられるわけだ。〔…〕とところがいまほくの個人的に体験している苦役ときたら、他のあらゆる人間の世界から孤立している自分ひとりの堅穴を、絶望的に深く掘り進んでいることにすぎない。〔…〕」

以上は、鳥が自身の「個人的な体験」について心境を吐露している箇所である。この鳥の発話からわかるように、彼は自分の身に生じた「個人的な体験」が「人間一般にかかわる」ことができないものと認識している。後述するように、彼の「個人的な体験」を、普遍化しようと試みるのが火見子であり、彼女が志向する普遍性とは核兵器の問題である。だが、最終的に鳥が彼女を見捨てることから、棄原の指摘に代表されるように、「個人的な体験」という小説は、他人には共有されず、一般化できない一回かぎりのまさに「個人的な体験」を追っている」ようにみえる。

だが、川口隆行は、こうした鳥の決断から普遍性を脱色するような主張に対して、そもそも彼が「個と普遍の相互補完的關係」を前提としている点を問題化し、「大切なのは、普遍に対して個

の優位や絶対を主張することではなく、個／普遍という図式を成立基盤とする小説世界の表象機制自体を対象化すること」だと述べ、「鳥が執拗に「自分の手」にこだわるのは（個から普遍へ）」という言説を、内面化しようとする欲望の現れ」であり、「その到着点が嬰兒救済を「欺瞞なしの方法」として決断することであった」と指摘する。つまり、鳥が火見子を見捨てた行為は、決して普遍性の放棄を意味するものではなく、逆にそのようにしてまで個に執着することこそが、普遍性を獲得することに繋がることなのである。川口の指摘通り、赤んぼうとの問題に執着することのできる普遍的な次元へ至るといふ欲望を、鳥が抱いているのであれば、鳥が救い出した赤んぼうには、少なからず彼を普遍性へと導く要素が含まれているはずだ。

では、赤んぼうに仮託された普遍性とは何か。それはすでに冒頭部に示されている。

アフリカ大陸は、うつむいた男の頭蓋骨の形に似ている。(…) 地図の下の隅の人口分布を示す小さなアフリカは腐蝕しはじめている死んだ頭に似ているし、(…) なまなましく暴力的な変死の印象をよびおこす。(…) アフリカのように、めまぐるしく変化しつづつある大陸の地図は、その古びかたも早い。そこから世界全図の総体への侵蝕がはじまるのだ。

「豪華本」の「地図」から立ち上がるアフリカは、すでに「腐蝕しはじめている死んだ頭」として、「暴力的な変死の印象をよびおこす」ものとして表象される。蓮實重彦は、「このアフリカ

地図は、ここに始まろうとしている「作品」が頭蓋骨の物語として綴られるだろう濃密な予感を、あたりに波及させることになる」と指摘している。山本昭宏<sup>10</sup>もまた、この「地図」は「頭部に異常を抱えて息子が生まれるという出来事を暗示している」との見解を示している。だが、果たしてアフリカ「地図」は物語の展開を示唆するために用意されたものなのか。

大江は「アフリカへ、こちらの周縁から」（『群像』一九八九年一二月）の中で、本作を振り返りながら、

当時私がアフリカ地図に向けていたロマンティックな憧れには、同時代のアフリカの政治的な状況への関心が表裏一体をなしていて、そこから傷ましく暴力的な暗いイメージの生成があったといわねばならないように思います。／(…) 個を畸型の出産のかたちで襲う暴力と、同時代のアフリカの政治状況に露出していた暴力とを、深いところで小説（松本注——『個人的な体験』）のメタファーはつないでいるのです。

と述べるように、冒頭のアフリカ「地図」は、赤んぼうの頭を襲う「暴力」と、「同時代のアフリカの政治状況に露出していた暴力」とが二重写しに描かれていたことがわかる。大江は、この「同時代のアフリカの政治状況に露出していた暴力」について、前掲「アフリカへ、こちらの周縁から」の中で、「六〇年代のアフリカ諸国の独立、新植民地主義との闘い、というめざましい課題にひきつけられていた」と述べている。

大江がいう「アフリカ諸国の独立、新植民地主義との闘い」が

行われた一九六〇年は、その意味で「アフリカの年」と呼ばれる。民族主義者の独立運動によって、一九五七年三月にガーナがアフリカで初めて独立したことを契機に、その衝撃が周りの国々へ波及し、一九六〇年には一七国が植民地支配から脱して独立を果たした<sup>⑪</sup>。だが、この独立運動は入植民と現地民による単線的図式で解釈されるべきものではない。アフリカの独立運動は、米ソの二極化を背景とした一種の代理戦争だったのである<sup>⑫</sup>。

こうした同時代背景を踏まえると、アフリカ諸国の独立は、世界全図の大幅な書き換えを要請する出来事だったのであり、まさしく、冒頭部で鳥が読み取るように、「めまぐるしく変化しつつある大陸の地図は、その古びかたも早」く、「そこから世界全図の総体への侵蝕がはじまる」のである。

そして、この「めまぐるしく変化しつつある」アフリカ「地図」は、「緯度、経度ともコンパスでひかれたメカニツクな線ではなく、画家の人間らしい不安定と余裕とを感じとらせる肉太な線で表現されている」。アフリカの国境線に直線が多用されていることは周知の通りであり、そうした人為的に引かれた国境線は、植民地主義におけるアフリカ分割に伴う暴力性を暗示しているが、重要なのは、そうした「地図」が赤んぼうの「頭部」を模していることである。赤んぼうが誕生した際、「人体解剖図」を「独自の法の権威の旗」として掲げる医師は、「正常に育つ希望」のない赤んぼうを、「解剖」する対象として見做し、「《現物》」という名称を宛がう。人と「《現物》」との境界線を引く行為は、アフリカ「地図」における国境線の引き方と相似形をなしていよう。アフリカ「地図」に描かれる線が、「人間らしい不安定と余裕とを感じとら

せる」と描写されるように、そうした境界線がいかに恣意的で空虚なものであるかを、冒頭の「アフリカ「地図」」は物語っているのである。

「勇敢」であることを確かめる場として想定されているアフリカの地で、自分「専用のひとつの戦争」を体験したいと願う鳥<sup>バード</sup>。既述のように、鳥がアフリカを「めまぐるしく変化しつつある大陸」と読み取っていることや、赤んぼうが誕生するまで「核兵器廃止のアップीलに参加する」政治活動を行っていたことを踏まえると、彼は「地図」から同時代のアフリカ情勢を正しく読み取っていたと考えられる。だが、それと鳥の「冒険」志向の内実とが乖離していることに注意せねばならない。

まず、そもそも鳥が希求する「戦争」体験とは、言葉通りの意味ではない。鳥は「戦争」体験を「喧嘩のまえにも、受験のまえにも考えたし、また結婚のまえにだっと思って考えて」いたにもかかわらず、実際、地方都市の不良時代に「朝鮮で戦争」が行われている際には、「戦争」へ連れて行かれるという噂に脅かされていたからだ。彼がいう「戦争」とは、あくまでも「冒険史」や「小説」から想起されるアフリカの地で、「現在の安穩で慢性的に欲求不満な日常生活の彼方にあるものを、かいま」みせてくれる「冒険」的空想である。

鳥が、こうした現実的な側面を捨象した、想像上のアフリカの大地を求める以上、彼が現実的なアフリカに到着するためには、その可能性を有する誰かの手を借りるしかない。次節では、その点を検討する上で、まずは物語における鳥と火見子の人物像を確認していく。

### 3. 鳥と火見子の人物像

鳥は、繰り返し返される日常生活から「脱出」することを希求し、反復不可能な体験をする場としてアフリカを想定する。アフリカ旅行での経験を記した「冒険記」を出版することが鳥の夢として語られるが、その「冒険記」の標題は「《アフリカの空》」である。この標題は空高く自由に飛行するイメージを喚起させる「鳥」という渾名に適したものとなっていよう。しかし、現在の「二十七歳と四箇月」の鳥は、赤んぼうの誕生によって「アフリカへひとりで旅に出ることなどまったく不可能」な状態にある。「家庭の檻に閉じこめられ」て羽ばたくことができない鳥が、「水死体」と表現されるように、鳥にとつて飛び立つことができない状態は、溺れている状態と等しいのだ。

鳥はかれがつねに熱中して読むアフリカ関係書のひとつの探検史で、このような一節に出会った、《探検家たちが例外なく語る村人たちの泥酔騒ぎは、今もあり、そのことは今もなおこの美しい国の生活には何か欠けるものがあること、絶望的な自暴自棄へ人々を追いかむ根源的な不満があることを示している》。

また鳥は、結婚後、四週間アルコールを飲み続け、「精神的禁治産者」となった背景に、「自分自身の生活の内なる何か欠けるものと根源的な不満」が関係していると推察しつつも、そのこと

を「徹底して考えてみることを避ける。そのため、鳥には常に日常生活から脱落する危険性が付き纏うわけだが、注目したいのは、それが「アルコールの海を漂流」した経験として描かれることである。

鳥は、赤んぼうの異常を伝える知らせを受け、病院へ向かう途中、空中に舞う「オナガ」という鳥の群れを看取る。「オナガ」の尾に「水滴が虱のようにたかっている」情景は、「泥酔したロビンソン・クルーソー」に擬せられる「ウイスキーの地獄」の記憶を鳥に甦らせた。彼は、「アルコールの海を漂流」したことで、「精神的禁治産者」となった過去をもつがゆえに、「深い緑の海のかたまり」の「洪水に溺れる」ことを想起して「怯え」てしまう。つまり本作において、鳥は海を渡ることができない人物として造形されているのだ。

その後、鳥は赤んぼうと対峙することを避けるように地中に潜り込む「ドブ鼠」と表現される。この「ドブ鼠」と称される鳥が掘り続ける穴は、「堅穴式」として描かれる。「堅穴式」の穴とは、「他のあらゆる人間の世界から孤立している自分ひとり」の穴であり、「人間一般にかかわる真実の展望のひらける抜け道」に出ることがない穴である。自由に羽ばたいて海を渡ることができないばかりか、外部の世界と隔てられた空間で、ただひとりの孤独な「堅穴式」の穴を掘り続ける鳥の在り方を、本稿では垂直軸的な在り方と定義付けたい。

対して、彼を憧憬するアフリカの大地に導く人物として登場するのが火見子である。彼女の祖母はロシア人であり、「ウラジオストックから誘拐」されるように日本へ連れてこられた人物であ

る。火見子には越境可能性をもつことが暗示されており、またその点は彼女の名前の由来である「風土記逸文」においても確認できる。

火の國に幸して海を渡りたまふ間に、日没れ夜暗くして着く所を知らず。忽に火の光あり。遙に行前に視ゆ。天皇、舟中に勅して曰りたまはく「行前に火見ゆ。直に指して往け」とのりたまひけり。勅の隨に往くに果にして崖に着くことを得。

石橋紀俊は、「景行天皇」の諸国巡行をめぐる右の一節にある「火」（火見子）を「混沌と秩序、あるいは死と再生の両義に開かれた神話的記号」として読み取るが、ここでは「火」（火見子）が海を超えて「火の國」へ向かう「景行天皇」を導く者として描かれる点に注目したい。彼女の名前には、誰かを海を越えた向こう側へと導く案内人としての性質が付与されているのだ。

また火見子の愛用する「MG」がもつ性質は、彼女がもつ越境可能性と符合する。「MG」は、「ゆさゆさ揺れ」る「ボート」として、彼女の運転は「船酔いのような気分を味わわせる」ものとして、前照灯が破壊された際には「沈もうとする船」として表象されるからだ。概して「MG」は、海を渡り、アフリカへと到着可能性を有するものとして描かれている。

すなわち、「竪穴式」の穴を掘り続けている鳥を、アフリカへと導く可能性を有する火見子は、彼の穴を「抜け道のある洞穴式へ」と転換することができる、いわば水平軸を象徴する人物なの

である。野口武彦は、「火見子・アフリカ・アルコールというイメージの系列を「脱出」という観念」で捉え、それを「水平型の空間ないしは空間移動の体験である」と指摘しているが、本稿が定義付ける火見子の水平軸的な在り方とは、野口がいう空間性だけにとどまらない。両者の垂直／水平という対照性は、彼らの思考様式においても表されているからだ。鳥は赤んぼうの誕生を、「固有の不幸」として特権化する一方、火見子はそれを「核物質の灰で汚れた雨の影響」という「人類すべてにかかわる」共通の出来事として捉える。

火見子は、仮に鳥の個人的な問題が「わたしにも共通の問題」だったとすれば、彼の掘る穴を「竪穴式から、抜け道のある洞穴式へ、変え」ることができ、「人間一般にかかわる真実の展望のひらける抜け道に出る」という。ゆえに、最終的に火見子が鳥を救済するために考え出した術は、赤んぼうを「わたしたちの手」で見捨てるという問題の共有化である。火見子は、鳥の「個人的な体験」を「人類すべてにかかわる」共通の出来事として置換しようとし、彼の体験から「人間的な意味」を見出そうとするのだ。この垂直軸が水平軸へと転換していく場として用意されるのが、二人が赤んぼうを墮胎医の所へ引き渡しに行く場面である。

#### 4. 垂直軸から水平軸へ

鳥は火見子の「MG」に乗り、彼女とともに赤んぼうを連れて墮胎医のいる病院へ向かう。その道中、火見子は鳥に對し、以下の言葉を告げる。

「…」たいていの人間が、とくに理由もなく、この地球の存続を信じて、また、それを望んでいるように、その黒い心をもった人びとは、やはりこれという理由もなく、人類の滅亡を信じて、それを望んでいるのじゃないかと思うのよ。鼠みたいに小さなレミングという北地産の獣は時どき、集団自殺をすることがあるというけど、この地上にはレミング風の人びとがいるのじゃないかしら、鳥<sup>バード</sup>」

ここでは、「黒い心をもった、レミング風の人間」のように、赤んぼうを殺すことと、「核戦争」で「人類の滅亡を信じて、それを望」むことが等価に描かれる点に注目したい。火見子は、赤んぼうの問題を人類共通の問題へと置換する。個人的な問題は普遍化できないという認識に固執していたはずの鳥だが、彼は自身の内部に「黒い心をもった、レミング風の存在」が「かすめてすぎるのを感じ」取る。鳥の「竪穴式」という垂直軸を「洞穴式」という水平軸へと転換する火見子は、「鼠」へと変わった鳥に「黒い心をもった」「鼠」(レミング)の存在を気づかせるのだ。

そして鳥が「レミング風の存在」を感じした後、赤んぼうは「泣き声」をあげる。火見子は、その「泣き声」は「人間のあり」とある言葉のすべての意味をはらんでいるのかもしれないという。鳥は、赤んぼうの「泣き声」に対し、「われわれにそれを聴きとる能力がなくてさいわいだよ」というが、彼はそのことに安堵するのではなく、「不安にかられ」る。その直後に鳥が、「トラックス群の轟音のうちに意味のはっきりしない」「呼びかけ」を聴き

取るうとするのは、赤んぼうの「泣き声」が、あらゆる言葉の「意味」を内包しているという火見子の言葉に影響されたからに他ならない。

したがって、鳥に突き付けられた二つの「選択」肢、つまり赤んぼうを見捨てるのか否かという「選択」は、彼の死が人類全体の死と等価性をもつという「意味」を引き受けるか、それとも、「人間のあり」とある言葉のすべての意味」を引き受けるかという「選択」でもあったのである。結局、鳥はアフリカへ旅立つという「抜け道」を放棄し、赤んぼうを引き受ける「選択」をする。

では、鳥にとって現実的なアフリカとは、どのような様相を呈していたのか。それは赤んぼうを墮胎医のもとに連れていく場面に描かれる。

灰色のサハラ砂漠に佇む索漠とした自由な男、かれは東経一四〇度のトンボの形をした島で赤んぼうを殺し逃亡してきたのだが、アフリアじゅう歩きまわってイボイノシシはおろか地鼠いっぴき捕まえられなくてサハラ砂漠で茫然としている。

赤んぼうとの苦悩の日々を通し、彼が夢みたアフリカは、「サハラ砂漠」に一人佇むという荒涼なイメージによって象られているが、なぜ現実手に手の届く位置にあったアフリカの大地が「サハラ砂漠」なのか。

「サハラ砂漠」は、アルジェリアの南部に位置する。当時、アルジェリアはフランスからの独立を目指す「アルジェリア独立戦

争」(一九五四年—一九六二年)の只中であつた。大江自身も、アルジェリアの勝利で終わったこの戦争を、「植民地主義が『今日』との戦いにやぶれた」出来事であるとする評言を残しているのだが、ここでは、当時「サハラ沙漠」で行われたフランスによる初の核実験のことを、使用された核爆弾の暗号名が「ジェルボアーズ・ブルー」(青のトビネズミ)であつたことを問題化した。

既述のように、火見子は、赤んぼうの死が「核戦争」による人類全体の死を暗示する「鼠」の存在を示唆し、赤んぼうの「声」が「言葉のすべての意味」を孕んでいることを伝える存在であつた。想像上のアフリカを立ち上げていた「地図」を、「実用地図」として使用可能なものに転換できる火見子は、鳥に対し、「サハラ沙漠」の核実験という同時代の課題を想起させる役回りを担っていたのではないか。「めまぐるしく変化しつつある大陸の地図」に刻まれた、「世界全図の総体への侵蝕がはじまる」予感は、アフリカの独立運動が行われた最中に実施された核実験の脅威を暗示しよう。現実逃避する「ドブ鼠」が、赤んぼうを見捨てるという方法で現実的な課題に接近した際、「青のトビネズミ」という核実験が実施された「サハラ沙漠」の地を想起し、最終的に自らが核戦争を望む「レミング」へと変容していく軌跡。鳥は、こうした同時代の核の問題が付着する「鼠」の表象を振り払い、火見子から一種の普遍性を仮託された赤んぼうを引き受ける「選択」をしたのである。

そして、最終的に「竪穴式」と「洞穴式」の穴を掘り続けることを止めた鳥は、自らを「ゼロ」と定位する。だが、鳥はこの在

り方を、どのようなにして選び取つたのか。その点を考察する上で注目すべき人物は、デルチェフさんと菊比古である。

火見子が鳥の「竪穴式」の穴を「抜け道のある洞穴式」に変えようと試みる人物であれば、デルチェフさんは、そもそも「抜け道」を用意せず、「閉鎖的な場所のどんぐりまり」の空間に留まり続ける人物である。私的な理由で外交官の公務を放棄している彼は、見つければ祖国へ強制送還されることを十分理解しており、仮にその事態になれば、行動の「責任」を取つてその職を失う覚悟をもつ。そんなデルチェフさんだからこそ、「袋小路」の空間に留まりながらも、外部から訪れた鳥を「両腕を勢いよくかかげて」迎え、散髪に出掛けた「女友達」の帰りを待ち続けることができるのである。つまり、扉に「希望」と書いた「辞書」を授けるデルチェフさんは、「抜け道」を出た先に「希望」を求めるのでなく、「袋小路」の中に「希望」を求め、その場に留まり続ける姿勢を鳥に提示しているのだ。

また、「バルカン半島の小さな社会主義国」について考えるとき、かつて大江が一九六一年にブルガリア、ポーランドの招待でヨーロッパへ出発し、そこで最初に降り立ったブルガリアを「バルカン半島の小さな国ブルガリア」と称していたことが想起される。大江は、有名な観光地であつた「黒海沿岸で遊んでいる快樂的な青年」と「集団農場でせっせと働いている青年」という「二つの顔」をもつブルガリアを、「社会主義圏へのもっとも明るい西側からの窓」と評しつつも、「その向うにはいりたいたいのだ、という門のところでは自分が微笑しながらひきさがらざるをえないのを感じた」と述べている。

いわゆる「鉄のカーテン」で世界が東西に二分されていた時代。大江が「向う」側へ入れない戸惑いを覚えた一九六一年は、奇しくもベルリンの壁の建設が開始された年でもある。隠遁生活を送っているデルチェフさんを探し行った際、アパートの入り口に立つ「大女」が彼のことを「《アメリカ人》」と間違えていたのも、こうした人の移動が厳しく制限されていた当時の事情に照応するだろう。

だが、一九六〇年代前半からバルカン半島を含む東欧諸国が、西側諸国を対象とした「観光業」でもって「鉄のカーテン」を開いたことを忘れてはならない。例えば、一九六三年にチェコスロバキアは部分的に西側観光客に国境を開放しており、この措置を西側が「雪どけ」のしるしと読み取ったとされている。ブルガリアはしばしば「東欧で農業の集団化を成しとげた国」「ソヴィエト連邦ともっとも親しい国」と評されることが多いが、その一方で「観光業」を取り入れて西側諸国と交流をもつ一面も兼ね備えているのであり、そうした両義性は大江が看取した「二つの顔」をもつブルガリアのイメージと呼応するだろう。「バルカン半島の小さな社会主義国」のデルチェフさんは、外部から他者を迎え入れる、まさに「窓」の役割を担っていたのである。

一方で菊比古は、「ゲイ・バーの経営者」として自ら生活の場をつくり、その空間に居続ける人物である。「同性愛を実行することを選んだ人間」である菊比古は、まさにその場に留まり続けることを、「実行することを選んだ人間」だといえる。また、菊比古と再会した際に、鳥の意識の前景に現れたのは「かつての友人」ではなく、「ゲイ・バーの経営者」というような職業の人間」で

あった。

ここで強調されている「ゲイ・バー」という職業について、三浦順子<sup>(26)</sup>は、戦後に顕在化した「セックス・ワーカー」たる「女装男娼」と区別される形で、一九五〇年代に飲食業を主とする「ゲイ・バー」が成立し、五〇年代後半になると、「女形」でも「男娼」でも「ゲイボーイ」でもない、つまり女装を職業とせず、純粹なアマチュアの立場で趣味として女装を行う人々が出現したと指摘している。こうした状況に相俟って、六〇年代には「同性愛者」だけでなく「異性愛者」をも客層として含み込む「観光用ゲイ・バー」なるものも登場している。

このように「ゲイ・バー」の形態や客層が多様化していた中で、「ゲイ・バーの経営者」をしている菊比古の意識は、常に多種多様なお客を迎え入れるよう外側へと開かれているといえる。「フランスの実存主義者の言葉」を知っている程に彼は、様々な人々と交流ができるように「博識」であろうと努めているからだ。つまり、こうした菊比古との再会を機に翻意を遂げた鳥は、外側から赤んぼうを迎え入れ、「袋小路」の空間に留まり続けることを「選択」したのである。

では、この留まり続ける在り方と「ゼロ」と定位した在り方とはいかに結節するのか。その点を紐解く糸口は、結末部で「ガイド」という職業を「選択」し、「辞書」を参照する鳥の生き方にある。

## 5. 「ガイド」と「辞書」

物語の終末部、鳥は来日する「外国人のための、現地人のガイド役」になることを決断する。鳥が「選択」した「ガイド」という職業は、日々同じ景色を見て、同じ場所をめぐる、同じ道筋で「観光客」を案内するという、反復・持続性を帯びている。またそれは「観光客」がその都度入れ替わるため、一回性の出来事としてもある。したがって、「ガイド」とは、こうした反復・持続性をもつ行為を、他者のために一回性の出来事として置き換え続ける職業なのである。

つまり、「ガイド」という職業を「選択」した鳥の生き方とは、一回性と再帰性を有する在り方を示しているのだ。柴田勝二は、この「選択自体」を「他者の存在に浸食される去勢」と解していたが、むしろ鳥は留まり続ける在り方を示していたデルチェフさんや菊比古といった他者の「声」を主体的に聴き入れたからこそ、「ガイド」になることを「選択」したのである。ゆえに鳥は、「外国人の観光客」という外部から訪れる人々を迎え入れることを、換言すれば、多種多様な言語が飛び交う場に身を置きながら、それらの「声」を聴き入れる「ガイド」という職業を「選択」したのである。

またここでは、鳥が「アフリカ地図を見おろす」す冒頭部と、「ガイド」を行うことを決断した結末部とが、対応している点に注目したい。「アフリカの地図を見おろす」ように、空間を俯瞰的に捉える視点をもつ鳥は、「地図」を参照し続けることでアフリカ

の大地に自分自身を立ち上げていた。しかし、最後に鳥が「選択」した「ガイド」とはいわば、「地図」ではなく、自分自身を参照し続ける職業である。

「ウイスキーの地獄」によって日常生活から脱落した経験をしたにもかかわらず、その原因とされる「自分自身の生活の内なる何か欠けるものと根源的な不満について徹底して考えてみることを」避けていた鳥、自分自身を参照し続ける生き方を「選択」した彼は、「袋小路」の中で「自分自身の生活の内なる何か欠けるものと根源的な不満」に対して向き合い続けることを「選択」したのである。赤んぼうの瞳に「自分の新しい顔」が不鮮明に映った鳥は、「家にかえりついたならまず鏡をみよう」と宣言するように、彼は「ゼロ」となった自分を見続けることで、その都度、自分が「ゼロ」であることを確認するのである。

「袋小路」の中に「希望」を求めながら赤んぼうの傍らに居続けること、そして、そうした場で繰り返される日常生活を一回性の出来事として捉え直すために、その都度、「ゼロ」であり続けることができるように、「忍耐」していくこと。「ガイド」という職業を「選択」した鳥の生き方には、このように留まり続ける在り方と、「ゼロ」と定位した在り方とが連関しているのである。

では、そうした在り方と「辞書」を参照する行為とはいかに結びつくのか。まず、この「辞書」について考えるとき、留まり続ける在り方を示していたデルチェフさんや菊比古が、他者と意思疎通が図れるよう工夫を凝らす人物であったことを思い起こしたい。例えば、「日本語」が話せないデルチェフさんは、「英語」が

話せない「女友達」と「黙って理解し」合う。一方で菊比古は、既述のように「ゲイ・バーの経営者」として多種多様な人たちと会話ができるように「博識」であろうと努める。赤んぼうは、「I・Qのきわめて低い子供に育つ可能性」をもつが、それは鳥と赤んぼうとのコミュニケーション間に齟齬が生じる可能性をも暗示している。思えば、そもそも鳥自身も「小学生の時分」に「吃りの習慣」がある人物であった。つまり鳥にとって「辞書」とは、一見赤んぼうと意思疎通を図る上で欠かせないものだったと考えられる。

ただし、ここで見過ごしてはならないのは、鳥が参照し続ける「辞書」が、「バルカン半島の小さな国」の「辞書」であることだ。デルチェフさんが「スラヴ語」を話すことから、それは「スラヴ語」を「英語でひく」体裁の「辞書」だと考えられる。

つまり、鳥が「辞書」を参照し続ける行為は、例えば、『忍耐』という言葉が「日本語」であったように、「日本語」を「英語」へ、それをさらに「スラヴ語」へと変換し続けることを意味している。言語から言語へと変換し続ける行為により、言葉の「意味」は、絶えず相対化されていき、決定不可能性を帯びる。皮肉にも、「辞書」を引き続ければ引き続けるほど、言葉の「意味」が確定できないという事態を招き、決定不可能な複数の言葉の「意味」が氾濫していくこと。それはまさしく「ありとある言葉のすべての意味」となるはずで、結末部で鳥が手にする「スラヴ語」を「英語でひく」体裁の「辞書」は、「ありとある言葉のすべての意味」を孕む「声」をもつ赤んぼうと対峙する上で、ふさわしいものであったといえる。

とはいえ、言葉の「意味」が絶えず相対化され、確定できない以上、「辞書」を参照する鳥の行為によって、赤んぼうとの生活が、まさに『希望』を帯びたものへと転換するとは考えにくい。鳥にとつて「辞書」とは、赤んぼうと意思疎通を図るためのものではなかったからだ。とすれば重要なのは、「辞書」を参照して言葉の「意味」を探し求めることではなく、引き続ける行為そのもの、つまり言葉の「意味」が絶えず相対化されていく場に、『忍耐』しながら踏み留まり続けることである。

かつて「英語」の予備校教師をしていた「鳥」の役割は文章の意味の全体を総合し総括してやることであった。しかし、「辞書」を手にした鳥はもはや、「英語」を「日本語」に変換し、それらの言葉の「意味」の「全体を総合し総括」することができないばかりか、「意味」そのものが相対化される事態に直面する。翻つていえば、そうした場に留まり続けることにより、言葉の「意味」を一对一の関係で結んできた鳥の主体は絶えず攪乱され続けるはずだ。彼はそうした「意味」が相対化される緊張の場に身を置くことで、その都度、一種の翻訳者たる自らの主体を「ゼロ」にし続けることを「選択」したのである。

## 6. おわりに

本稿では、現実逃避するための想像上のアフリカを立ち上げる「地図」を手放し、「辞書」を携えて赤んぼうの傍に居続けることを「選択」する鳥の有り様を追ってきた。その上で、主体化の過程を経て鳥が自らを「ゼロ」と定位した存在方に着目し、それを

結末部で「ガイド」という職業を「選択」し、「辞書」を参照する彼の生き方と連関させて読解してきた。他者のために反復する行為を一回性の出来事として捉え直し続ける「ガイド」という職業と、三つの言語を介することで、翻訳者たる自らの主体そのものを不安定化し続ける「辞書」とは、いずれも「ゼロ」であり続ける在り方を指示していた。

また「個人的な体験」は、火見子やデルチェフさん、菊比古といった鳥の「個人的な体験」を相対化する視点をもつ人物を描いており、東西冷戦下の「袋小路」の状況を、アフリカの独立運動やソ連、フランスの核実験でもって前景化している作品であった。東欧諸国が行った「観光業」とは、そうした東西に二極化している状況下で双方の文化交流を促し相互理解を深めるといふ同時代的意味が含まれていたのである。「バルカン半島の小さな社会主義国」のデルチェフさんが鳥の「スラヴ語研究会」の講師であった必要性はこうした事情に求められるのであり、最終的に「外国人の観光客相手のガイド」という職業を「選択」した鳥は、いわば東側からの「窓」となり得る可能性を秘めた「《希望》」であったといえよう。

物語は、鳥が「扉に《希望》と書かれた「辞書」で『《忍耐》』という言葉を引くことが示唆されて終わりを迎える。この『《忍耐》』という言葉は、鳥との別れ際に火見子が発した言葉であり、その際に彼女は赤んぼうのことを「無意味な存在」と決めつけていた。『個人的な体験』は、そうした「意味」が相対化される場に『《忍耐》』しながら踏み留まり続けるために、その都度、翻訳者たる自らの主体を「ゼロ」にし続けるために、「バルカン半島

の小さな国の辞書」を参照し続けることを「選択」した鳥の生き方を描いた作品なのである。

#### 注

- (1) 大江健三郎『《かつてあじわったことのない深甚な恐怖感が鳥をとらえた。》』（『個人的な体験』新潮社、一九八一年二月）
- (2) 松原新一「大江健三郎の世界」（講談社、一九六七年一〇月）
- (3) 桑原文和「大江健三郎『個人的な体験』論―決断すること―」（『国語国文研究』一九九一年七月）
- (4) 柴田勝二「《鏡》のなかの世界―『個人的な体験』のイメージ構築」（『東京外国語大学論集』二〇〇三年一月）
- (5) 高橋由貴「言葉ならぬ声を聴く鳥―大江健三郎『個人的な体験』論―」（『国語と国文学』二〇一三年七月）
- (6) 服部訓和「自転車の詩学―大江健三郎『不満足』『個人的な体験』を読む―」（『稿本近代文学』二〇〇九年十二月）
- (7) 北山敏秀「二声のない」呼びかけを聴く―大江健三郎『個人的な体験』における規範への意識と、規範を差異化する身体」（『社会文学』二〇一九年三月）
- (8) 川口隆行「大江健三郎『個人的な体験』論―〈家父長的想像力の臨界点〉―」（『広島大学教育学部紀要 第二部』一九九八年三月）
- (9) 蓮實重彦「大江健三郎論」（青土社、一九八〇年一二月）
- (10) 山本昭宏「大江健三郎とその時代」（人文書院、二〇一九年九月）
- (11) 西川潤「アフリカの独立」（平凡社、一九七三年四月）を参照。
- (12) 小倉充夫、松田クラークセンさやか「解放と暴力 植民地支配

- とアフリカの現在』(東京大学出版会、二〇一八年一〇月)
- (13) 武田知弘『ワケありな国境』(筑摩書房、二〇一一年八月)を参照。
- (14) 『新編日本古典文学全集5 風土記』(植垣節也訳、小学館、一九九七年一〇月)
- (15) 石橋紀俊「大江健三郎『個人的な体験』論―赤・色・身体・間―テクスト性あるいは事前性―」(論樹)一九九五年九月
- (16) 野口武彦『吠え声・叫び声・沈黙 大江健三郎の世界―』(新潮社、一九七一年一月)
- (17) 大江健三郎「アルジェリア―傷だらけの平和」(『婦人公論』一九六二年五月)
- (18) 『原子力総合年表 = A General Chronology of Nuclear Power : 福島原発震災に至る道』(すいれん舎、二〇一四年七月)
- (19) 大江健三郎『世界の若者たち』(新潮社、一九六二年一月)
- (20) 前掲注(19)に同じ。
- (21) 広瀬嘉夫『東欧の新しい波』(鹿島研究所出版会、一九六七年一月)を参照。
- (22) アンリ・ボグダン『東欧の歴史』(高井道夫訳、中央公論社、一九九三年四月)を参照。
- (23) 前掲注(21)に同じ。
- (24) 上杉重二郎「ブルガリア―昨日と今日」(『経済評論』一九五九年五月)
- (25) 三橋順子『戦後日本女装・同性愛研究』(矢島正見編、中央大学出版部、二〇〇六年三月)
- (26) 吉行淳之介「やはりゲイバーならではの」(『週刊現代』一九六三年六月)を参照。
- (27) 「共産圏諸国との文化交流」(『内閣官房調査月報』一九六〇

年八月)の中で、「国交未回復の東欧共産圏のうち、ハンガリー(昭和三十四年八月二十九日)、ルーマニア(昭和三十四年九月一日)、ブルガリア(昭和三十四年九月十二日)との間に復交文書が調印され」、昭和三十二年に復交したチェコ、ポーランドとの間には、徐々に交流が拡大し、昨年はかなりの訪問がみられ、とくにチェコとの交流関係には著しい進展があった」と説かれているように、一九五〇年代後半から東欧諸国との交流が徐々に開始されたことがわかる。

#### 【附記】

本稿における小説の引用は、『大江健三郎小説2』(新潮社、一九九六年七月)によった。引用中の「…」は筆者による。なお本稿は、二〇一九年七月に行われた立教大学日本文学大会における口頭発表の内容を踏まえている。ご意見を下さった方々に深く御礼申し上げます。

(まつもと たくま 本学大学院博士後期課程)